

解説



IT化の進展と「品質工学」誌のこれから（その2）

Progress of DX and the Future of the Journal (2)

出版部会編集委員会

参加者：矢野耕也（日本大学）、植 英規（福島工業高等専門学校）、河田直樹（埼玉工業大学）、窪田葉子（日本水環境学会）、坂本雅基（花王）、杉山一宏（東京都中小企業振興公社）、近岡 淳（近岡技術経営研究所）、中島建夫（元東亜合成）、細井光夫（小松製作所）、水谷淳之介（富山高等専門学校）、見原文雄（日本能率協会コンサルティング）、茂木悠祐（IHI）、山本桂一郎（富山高等専門学校）

8. 著者とのコミュニケーション

中島 私の経験では、1か月でできないときには、1か月ぐらいのときに著者にメールを送った。「取り込み中でできませんでした、申し訳ありませんでした。もう少し時間をください」と。コミュニケーションを取れば、もう少し不満はなくなると思う。なにもレスポンスがない状態で1か月经過すると、私の論文はどうなっているのか、ということになると思う。著者も査読者が忙しいということは分かっていると思うので、その辺は折り合いをつけられると思うが、どうだろうか。

植 今のお話は、全くその通りだと思う。論文を投稿した側も、今どの段階にあるのか分からないのは心配である。電子投稿ができる学会誌には、今どのプロセスにあるか分かるものもある。そうすると、確かに進んでいるということが分かるので、良いと思う。査読する側にも、2週間から1か月ぐらい査読を進めてみて、ちょっと無理そうだなとなったときに、どこかに相談できる仕組みがあるといいのかな、という気がしている。何にせよ、論文の数を増やすという意味では、時間をきちんと管理するというのが大事だと思うので、査読を1か月という形で決めるのは仕方がないと思うが、そのために、査読者の方にも何か助けてあげる仕組みが必要と思う。

細井 植先生のおっしゃる通りと思う。私が言いたかったのは、中島先生が言っていた、著者とのコミ

ュニケーションが編集の仕事なのだという事。そこを分けたほうが良い。

中島 査読委員が著者に直接「できない」と連絡するわけではない。あくまでも編集委員から連絡するはずである。査読委員に督促したけれども、しばらく時間がかかるという回答を受けたときに、著者に対して「しばらくお待ちください」と連絡するわけだ。今、植さんが言ったように、査読していて困ったときは、査読委員から著者に対して質問リストを出すように、編集委員が促すべきではないだろうか。ワンクッション置かざるを得ないが、ワンクッション置くのも編集委員の仕事になるので、大変ではあるが、編集委員はとにかく大変である。

9. 編集のための情報共有インフラ

坂本 編集委員も一人で仕事をしているし、査読委員は一人で査読するので、詰まると詰まりっ放しになってしまうところはある。そのようなときに、それぞれでヘルプを出せるような仕組みがあると、確かにいいのかなと感じる。

窪田 今は、一旦査読を受けたが、ちょっとこれは私には無理だというときに、戻すルートがないような気がする。そのようなルートを確保しておかないと「やらなければいけない」と思って、ずるずる遅れるということになりがちかなと思う。

中島 戻すことは、できるのではないだろうか。